

広報 ～市民の力が輝く 共生のまち 宝塚～

# たからづか

10

2012 OCTOBER

No.1155

特集 補助犬と暮らす



じっと待つのも僕のお仕事  
(ダイエー宝塚中山店にて)



# 補助犬と暮らす

ありがとう——。

君がいたから、諦めていたことに

もう一度チャレンジしてみようという気になった。

家族として不自由な生活をサポートしてくれて、

社会参加を後押ししてくれて、ありがとう。

身体障害者補助犬法の施行から10年——。

皆さんは、その制定のきっかけとなった介助犬「シンシア」を知っていますか。シンシアは、平成18（2006）年に12歳で生涯を終えるまで宝塚市で活躍した、日本で3頭目の介助犬です。市では、平成11（1999）年から毎年1回「身体障害者補助犬シンポジウム」を開催していますが、まだまだ補助犬の認知度は高いとは言えず、障がいのある人にとって必要な補助犬をめぐる同伴拒否の問題が後を絶ちません。現在、宝塚市には介助犬2頭、盲導犬1頭が暮らしています。「シンシアのまち宝塚」にふさわしい、全ての人にやさしいまちにしていくためにも、まずは補助犬について知ることから始めませんか。



(写真：宝塚サマーフェスタにて)

## 介助犬

手や足の不自由な人のためにドアの開閉、冷蔵庫から飲み物を取り出す、落としたものを拾うなど、一人ひとりのニーズに合うよう訓練を受け、介助を行います。

## 聴導犬

耳の不自由な人のために、ドアのロック音や子どもの泣き声、ファクスや警報機の音など必要な音を聞き分け知らせてくれます。

## 盲導犬

目の不自由な人のために障害物を回避する、曲がり角があることを知らせるなど、目的地まで安全に誘導します。

# 補助犬のことを知ろう

介助犬・聴導犬・盲導犬の3種を身体障害者補助犬と言います。補助犬は、障がいのある人の生活に合わせて訓練された犬で、体の不自由な人の体の一部になって日常生活をサポートする大切な役割を担っています。また、平成14(2002)年10月には「身体障害者補助犬法」が施行され、公共施設や交通機関はもちろん、スーパーやレストランといった民間施設でも身体障害者補助犬の同伴ができるようになりました。平成24(2012)年9月1日時点での国内の実働頭数は介助犬62頭、聴導犬42頭、盲導犬1043頭です(盲導犬は平成24年3月31日時点)。



## シンシアと歩んだ道、エルモと歩む道

### コテ

イク、電話！」車椅子に乗った木村さんが指示を出す、エルモはすぐに寝室へと駆け足。ベッドに飛び乗り、傍らの机に置いてある電話を器用にくわえると、木村さんのもとへと戻ってきた。

### エルモは人との交流の緩衝材

身体障害者補助犬法の施行からこの10月でちょうど10年。16年前、制定のきっかけとなった介助犬「シンシア」と暮らし始めた木村佳友さんは、現在は2代目の介助犬「エルモ」と生活している。「エルモは僕にとって一人息子みたいな感じですね」そう語る木村さんの顔には穏やかな笑顔が浮かぶ。「エルモがいることで、周りの人がすごくニコニコして話しかけてくれたりする。エルモが人との交流の緩衝材になってくれているんです」

### 「コテ」を支えるのは介助犬との出会いから

木村さんは現在、本市にとどまらずさまざまな



### 木村さんとエルモのとある一日

#### 6:00

木村さん起床。水を飲んでから2kgの鉄アレイで30～40分ウエイトトレーニング。

#### 6:30

エルモ起床。

#### 8:00

エルモにご飯。木村さんは車椅子に乗って顔を洗い、歯を磨く。

#### 9:00～12:00

木村さんはパソコンを使って仕事を始める。木村さんが仕事を頼む時以外、エルモは自由時間。

#### 12:00～13:00

お昼ご飯。家族は出掛けているので、自分でパンを出し、エルモに冷蔵庫から飲み物を取ってもらいご飯を食べる。

#### 13:00～17:00

再び仕事。木村さんが仕事を頼む時以外、エルモは自由時間。

#### 17:30～18:30

エルモの散歩。

#### 19:00～20:00

晩ご飯。人のご飯が終わったら、エルモのご飯。

#### 20:00～23:00

木村さんはテレビを見たり、ブログを更新したりしてくつろぐ。エルモは眠くなると一足先に夢の中。

#### 23:00

木村さん就寝。夏は暑いのでエルモは夜中に起きだして涼しいところを探してうろろ。

### 今いかに必要ないか

10年を経ても補助犬を知らない人は未だ多く、以前は同伴OKだったお店に、急に同伴を拒否されたこともあるという。「補助犬は障がい者の体の一部の役割を果たすとともに、

場所に向いて補助犬の啓発活動を行っている。しかし、シンシアと出会った当初は法律もなく、介助犬はペット扱いをされ同伴拒否が非常に多かったという。街に出かけても嫌な思いばかりで外出することをためらうこともあった。そんな状況を変えたのが、1代目の介助犬「シンシア」の存在。「シンシアはこんなに僕の不自由な生活を手助けしてくれているのに、僕が嫌な思いをしたくないからといってシンシアと一緒に出掛けられないでいると、介助犬のことを知ってもらえないと思ってしまう。シンシアが、社会に働きかけようという気持ちにさせてくれました」

障がい者が社会参加しようという後押しもしてくれる大きな存在なので、それを市民の方々に理解してもらって、補助犬のことを正しく受け入れてほしい」

### 全ての人にやさしい「シンシアのまち宝塚」をつくるのはあなたの一声から

「介助犬がいるからといって何でもできるわけではないので、僕としては、障がいのある人が困っている様子を見掛けたら、「何かお手伝いすることありませんか」と一言声を掛けてくれるとすごくありがたいです」まずは一言の声掛けから。そこから全ての人にやさしいまちへの一歩を、一緒に踏み出しませんか。



# 理解が得られる日まで

## 宝塚補助犬支援の会



「盲導犬は公に交通機関を利用することも認められている。でも、介助犬はペット扱い。変やね、同じ障がいのある人を助ける犬なのに――」この疑問をきっかけに、介助犬・盲導犬が入れるお店調査を開始。そして、身体障害者補助犬法の施行を翌月に控えた平成14(2002)年9月、宝塚補助犬支援の会は結成されました。主な活動はイベントでのパネル展示やパンフレットの配布、グッズ販売など。

今回、宝塚補助犬支援の会会長の、中村文子さんにお話を伺いました。

### 相手の優しい気持ちに期待して

以前より「補助犬」という言葉を知る人は増えているが、未だ同伴拒否の問題はなくなりません。「お店に拒否された場合、法律で決まっていますよ」という言い方じゃなくて、何回か足を運んで分かってもらえるよう努力する。きちんと補助犬のことを理解してもらった上で、受け入れてくださる優しい

気持ち、それを相手に期待しているんです」

### まずは気付くことから

実際、同会の熱意に動かされた人もいます。「一番私が嬉しかったのは、私たちの活動がきっかけで、『車椅子のことまで気が付かなかった』と利用しやすいようにお店の改装を考えてくださるようになったこと」実際に足を運ぶことで、相手にも自然と優しい気持ち広がったのだろう。

### すべての人にやさしいまちを目指して

「私たちは補助犬のことで活動しているけど、それだけではないということを分かっています」――補助犬への理解を求めて始めた活動だった。しかしその活動は、障がいのある人だけでなくすべての人につながるものだ。「イコールですからね。それは私自身のことでもある。年をとってきて、私も、体が不自由になるんだから」



宝塚補助犬支援の会会長  
中村 文子さん

身体障害者補助犬法の施行から10年。しかしそれは、宝塚補助犬支援の会にとっては通過点の一つ。すべての人が暮らしやすいまちを目指して、その活動はこれからも続いていく。

## 日本一の福祉のまちを目指して～愛知県長久手市～

長久手市には、日本介助犬協会が運営する介助犬総合訓練センターがあり、「シンシアの丘」という愛称で親しまれています。長久手市と宝塚市は、この「シンシア」が取り持つご縁を大切に、今後も交流を深めていく取り組みを進めています。



長久手市  
吉田 一平市長

人と人をつなぐ「絆」を大切に考える本市では、現在「絆プロジェクト」を立ち上げ、すべての人が互いに支え合いながら、いきいきと暮らすことができるまちづくりを進めています。シンシアのまち宝塚と日本一の福祉のまちを目指す本市が今後、両市のきずなづくり事業をきっかけにより結びつきを強め、一人ひとりに役割と居場所のある社会を目指し、福祉の分野をはじめ、各分野においても相互に連携を図っていききたいと思っております。

## シンシアのまちづくりが残してくれたもの

「市として何かできないだろうか」当時介助犬の法的位置付けを求める運動が木村佳友さんと介助犬シンシアによって始められていた。自治体で支援を、といっても具体的なものが見えてこない中、平成10(1998)年12月の本会議でハーネス(胴輪)の助成を提案。市当局と何度も交渉を重ねる中、ついに要綱の改正によるハーネスの助成が実現した。「介助犬」が全国で初めて公文書に記載された瞬間だった。



小倉 実さん  
昭和58年～平成19年、本市市議会議員を務める。平成10年以降は議会において補助犬の重要性を取り上げ、その周知活動に貢献。

市が支援に動き出したことへの反響は大きく、補助犬への理解を求める運動は急速に広がった。「みんなが何となく嬉しそう、ものすごく応援しているという雰囲気、市民の皆さんの中ですごく多かったですね。心情的に“助けたい”、そういう思いが二重にも三重にも広がっていった。補助犬法の成立は、この宝塚市の取り組みから始まったといっても過言ではない。これからも、このまちづくりの原点を大切にしてほしい」と小倉さんは語る。

補助犬に注目が集まりがちだが、本来の目的は主役である障がいのある人の自立と社会参加。「未だ公的な施設であっても補助犬の同伴を拒否するところがあるので、改めて10年を迎えて、もう一度現状を見つめ直してほしい。障がいのある人が、健常者と分け隔てのない形で社会参加できる取り組みを、ぜひ行ってほしい」

市広報番組「知ってよ! 宝塚」では、10月1日から補助犬に関する番組を放送します。番組内では、本市在住の中山君江さんと盲導犬エリナも登場します。さらに、本誌35ページには補助犬イベントなども記載していますので、ぜひ併せてご覧ください。





## 市民の皆さまへ

～誰もが笑顔で暮らせるまちに～



宝塚市長 中川 智子

美しい光景に出会いました。9月初旬の夕方、宝塚北部の西谷を車で走っていた時のことです。目前に迫ってくる大きな木に真っ白な花がいっぱい咲いています。今の季節、泰山木たいさんぼくでもなし、木蓮もくれんでもないはずで、薄暮に包まれたその白さは目が吸い寄せられるほどきれいで鮮やか…。その正体は真横を通った瞬間に分かりました。「白鷺しらさぎ」でした。1本の木に、数えきれないほどの白鷺が眠っていたのです。夢のように美しく、胸が震えました。まぶたを閉じると今でもはっきりと蘇よみがえります。とても幻想的でした。市庁舎横の武庫川で時折餌をついばむ姿や、夕暮れ時、山の方に飛んでいく白鷺を見かけますが、眠っている姿を見たのは生まれて初めてのことでした。秋風が吹き始めると逆瀬川上流の西山地域にきれいなミヤマアカネが飛び交います。文字通り「茜色あかね」で、それはそれは美しいアカトンボ。西山小学校の児童は、地域の環境保護団体の皆さんとともにミヤマアカネを研究し、保全する活動を続けています。だんだん数も増えてきました。散策の折には、ぜひミヤマアカネを訪ねてください。

さて、今月の特集は「補助犬」についてです。使用者の方の目となり、耳となり、手足となる犬たちの紹介ですが、市内在住の木村佳友さんとエルモの暮らしに接すると、エルモは木村さんの体の一部なんだと実感します。エルモの前任者(?)シンシアは存在そのものが木村さんの“希望”でしたし、絶望の淵から彼を救ってくれた恩人でもありました。その姿に共感したたくさん仲間たちが作り上げた

汗と涙の結晶が「身体障害者補助犬法」。成立から10年を経て、もっと多くの人々に、理解し協力してもらいたいと思っています。「すべての人にやさしい社会」の実現に向けて、障がいがある人もない人も笑顔で暮らせるまちづくり、人々の支え合いが実感できる地域づくりへと大きな歩みを進めていきたいと考えています。

今夏、東日本大震災から1年半を経た被災地の市長・町長さんが次々と来宝くださいました。女川町長(宮城県)、須賀川市長(福島県)、南三陸町長(宮城県)から「宝塚の皆さん、本当にありがとうございます」とのお礼の言葉をしっかり受け取りました。職員派遣、宝塚希望応援隊が、自治体や被災者の皆さんにどれほど喜ばれているかを痛感しました。どの首長さんも「これからが正念場です」と決意を込めて話してくださいました。結び合った“絆”を大切に、これからも市民の皆さんと共に応援をさせていただこうと思ったことでした。

去る9月17日は敬老の日でした。今年度市内で100歳になる方は50人いらっしゃいます。その刻まれた歳月に想いをはせながら、お祝いに伺いました。アフリカでは「老人が一人亡くなると図書館がひとつ消える」という格言がありますが、高齢者施策の推進をがんばらねばと改めて心に誓いました。

今年の夏も暑かったですね。でも、皆さんと共に取り組んだ節電、目標を上回りました。ありがとうございました。夏の疲れが出るころですが、どうぞご自愛ください。